

What science can do

AstraZeneca

心臓の再生

アストラゼネカは、幹細胞活性化に関わる様々なシグナル伝達タンパク質が持つ役割を研究することによって、心筋組織の自己修復を可能にすることに取り組んでいます。

シグナル伝達タンパク質合成のため、リボソームにより翻訳されるメッセンジャーRNA

アストラゼネカ株式会社

〒530-0011 大阪府北区大深町3番1号 グランフロント大阪タワーB www.astrazeneca.co.jp/

TOPICS

今月の一枚 移転のお知らせ

保健・医療施設の機能集約

大阪南医療センターと河内長野市は地域医療や保健施策の推進に関する相互連携の協定を結んでいます。その協定に基づき、2021年4月1日に河内長野市の保健センター・休日急病診療所・子育て世代包括支援センターが大阪南医療センターの敷地内に移転しました。

二次救急医療機関である本院が、休日急病診療所による一次救急医療体制の充実に協力し、一次・二次の切れ目のない救急医療体制を構築するというコンセプトで進められた移転ですが、休日急病診療所だけでなく、子育て世代包括支援センターや保健センターの機能を集約し、母子保健事業やがん検診事業など、多分野にわたる連携強化が期待されています。

本院としましても、地域医療に貢献する重要な機会として捉え、河内長野市との連携強化をこれまで以上に推進していきます。

保健センター・休日急病診療所・子育て世代包括支援センター
移転の詳細はこちら

<https://www.city.kawachinagano.lg.jp/soshiki/8/16932.html>



携帯呼出サービス開始のお知らせ

患者様へのサービス向上の一環として、かねてより要望の多かった携帯呼出サービスを開始致しました。受付票に記載されるQRコードから登録することで診察・会計・予約日の前日になるとメールで通知が届くため、以前よりもスムーズに患者様をご案内することが可能となります。ぜひ、患者様へご紹介いただけますと幸いです。

広報誌「南窓」のご意見・ご感想をお聞かせください

広報誌「南窓」をお読みいただき、誠にありがとうございます。

<https://contact.osakaminamihosp.jp/>

お客様一人ひとりの声をより良い広報誌作りに活かしてゆきたいと考え、ご意見・ご感想を募集しております。

皆様からのご意見は、今後の改善を進める上で参考にさせていただきます。上記のURL または QRコードよりフォームにアクセスが可能です。

※ご意見・ご感想への返信はいたしておりません。ご了承ください。ご意見全てにはお答え出来ない場合がございます。予めご了承ください。



独立行政法人 国立病院機構
大阪南医療センター

地域医療支援病院 | 地域がん診療連携拠点病院
〒586-8521 大阪府河内長野市木戸東町2-1 Tel.0721-53-5761 Fax.0721-53-8904
<https://osakaminami.hosp.go.jp>



皆さんとともに大阪南の地域医療を支える広報誌

2021年5月号 No.9

独立行政法人 国立病院機構 大阪南医療センター
National Hospital Organization Osaka Miami Medical Center

診療科 NOW がん疾患センター



チーム一丸で「標準化」と「個別化」の両立に取り組んでいます

がん疾患センター部長、消化器科医長

なかにし ふみひこ
中西 文彦



「がん疾患センターの動画はこちら」

診療科の垣根を越えて、 強固に連携

「がん疾患センター」は、いわゆる目に見える組織ではありません。各診療科の垣根を払い、がん治療を有効に進めるための機能そのものといっていいでしょう。具体的には、地域がん診療連携拠点病院として地域、そして経験豊かな医師、看護師、薬剤師、放射線技師、薬剤師などがチームを組み、プロファイリングを重視して、がんの患者さん一人一人に対してオーダーメイドの治療をスムーズに提供できるよう、強固な医療連携を実践しています。ほかにもがん拠点病院の使命として、臨床研究、教育研修及び講演会などの啓蒙活動の役割も担っています。

新しい治療法に積極的に取り組んでいるのも、当センターの特徴。そのひとつがゲノム治療で、当院は厚生労働省より「がんゲノム医療連携病院」に指定され、「がんゲノム外来」も設置しています。

がんゲノムのほか 「がんドック」も実施

がんゲノム医療は、がんの組織を用いて多数の遺伝子を同時に調べ(がん遺伝子パネル検査)、遺伝子変異を明らかにすることにより、個々の患者さんの体調や状態に合わせて治療を行う医療です。まだ進化の途中であり、現在、当センターとしては、がんが進行し



た方、あるいは治療法の確立されていないがん種に対して検査を行い、たとえば、特殊な遺伝子の異常に使える薬など、新たな治療法に結びつけることを目的としています。

また、週に一度「がん総合ドック」も実施。内視鏡検査と同等の精度のある大腸CTなど、クリニックではなかなかできない検査も導入し、なるべく受診者の負担が少ないよう工夫しています。

大阪南医療センターは、国立病院として長く地域と結びつき、診療科ごとに、かかりつけ医の先生方と連携してきました。少子高齢化の波がとどまることを知らない今、それをさらに強化する必要があり、広く先生方にもご協力をお願いしたいと思えます。私たちはいつのときも、がん拠点病院の医師としての自負を持って、がん治療に向き合っています。



入院時から退院、退院後までを考え

切れ目のないサポートを実践する

がん診療連携総括部長 堀内 哲也 (ほりうち てつや) 主任医療社会事業専門職 (医療ソーシャルワーカー) 萬谷 和広 (まんたに かずひろ) 地域医療連携室長 医療福祉相談室長

看護師長 山中 真美子 (やまなか まみこ) 地域医療連携係長



「地域医療連携室の動画はこちら」

「地域医療連携室」は、地域医療を担う先生方や福祉関連施設と共働し、患者さんの紹介・逆紹介や情報共有を推進しています。また患者さんご家族のための相談窓口「医療福祉相談室」「がん相談支援センター」を開設。医療ソーシャルワーカー (MSW) がお困りごとや悩みを分かち合い、共に考え、解決の道を探り、診療中から退院後まで一人ひとりの心と生活に寄り添っています。

地域包括支援システムの構築を見据えて

堀内 地域医療連携には、かかりつけの先生方より紹介を受け、患者さんを各診療科へとつなげる「前方支援」と、患者さんが退院されるにあたり、各々のご希望や状態に合わせた療養場所への橋渡しをする「後方支援」があります。

当院における前方支援の特徴は、診療所・医院における夜診療の時間帯、そして土曜日の午前中にも受付が可能で、緊急の場合は外来の看護師とトリナージナスが連携し診療科の手配をし、基本的にはいかなる場合も、かかりつけの先生方からのご紹介患者さんを受け入れる取り組みをされていることです。また先生方への返書に関して、漏れのないように徹底し、患者さんの情報をお返しできるようにしています。さらに河内長野市が導入しているブルーカードシステムの登録病院として、かかりつけ医が作成されたブルーカードを所持されている患者さんの急変時

対応も行っています。ブルーカードに既往症など治療に必要な情報を記載していただき、それを当院のカルテに載せることで、素早く救急の応需ができるようにしています。

後方支援はMSWが大きな役割を果たします。なかでもチームとして私たちが重視しているのは、「入院のときから退院のことを考える」ということです。退院後をよりよいものにするための準備は私たちもおかなくてはなりません。そのためには入院中の患者さんの体調や精神面の変化を見逃さな



いことも大切です。前方・入院中・後方の支援が繋がっていることこそが肝要と考えています。

これからは、患者さんが地域で自分らしく生きていけるよう、周りの病院、診療所、保健所など各施設が手を組み、患者さんを支える「地域包括支援システム」の考え方がますます大切になってきます。私たちは地域連携支援病院として、何ができるのか、何をすべきかを常に考え続け、積極的な取り組みを実践したいと考えています。

相談の門戸を広く開け 患者さんを支える

萬谷 大阪南医療センターには私たち医療ソーシャルワーカーが7名在籍。事務方も多く充実したマンパワーで、退院後の生活・療養が少しでも負担なくスムーズに送れるよう後方支援を行っています。しかしそれだけではなく、入院中の患者さんやご家族の支えになることも、同じように重要視しています。その象徴といえる「がん相談支援センター」と「医療福祉相談室」は、気軽に相談していただけるよう平日9時～17時ならいつでも扉を開き、自由に入室してもらっています。もちろん電話相談も可能です。相談内容は経済面、社会制度、仕事復帰、療養の仕方、家族との関係、精神的不安についてなど本当に幅広く、私たちは院内や外部の福祉関係者などとも広く協議をし、患者さんの生活を手助けしています。

また、ただ待っているのではなく、病棟の看護師とのカンファレンスを通して気になる患者さんの情報を共有。決して見逃さないよう、こちらから働きかけることも大事にしています。

今では、がん治療をしながら働きたいと



望まれる方、終末期をご自宅という方など、患者さんのご希望や価値観は千差万別です。私たちはそのひとつひとつを大切にサポートすることを共通のモットーとしています。

今だけではない、長期的な視点を大切に

山中 4月から地域医療連携室に配属となりました。ここでは看護師6名とMSW、事務と協働して地域医療機関との有機的連携を基盤とし、前方連携、後方連携を行うことが主

たる業務になっています。また、後方連携では、退院後の療養方法、薬の管理方法などを指導、支援することを大切にしています。

病棟勤務では、当連携室の存在を心強く感じていました。患者さんやご家族の悩みに手を差し伸べ、病棟看護師と連携を取ってくださることで、私たちは患者さんの生活環境や思いをある程度理解して、それに寄り添った看護ができるからです。今後はこうした連携をさらに強くしたいと思っています。

また新しい環境下で私自身が目指しているのは、病棟の看護師たちに対し、「患者さんは地域で生活される人である」という視点を養ってもらえるような機会を設けたいということ。たとえば、訪問看護師さんやケアマネージャーさんなどの交流もそのひとつでしょう。退院後にどのような生活をされているかをフィードバックしてもらえる環境やシステムがあれば、点ではなく線、今目の前のことだけでなく将来までを念頭に置く看護ができ、看護師としてさらなるやりがいにつながると思うのです。そして、先ほど室長が言われた「地域包括支援システム」の一翼を担うのだという意識を、病院スタッフと確実に共有できるように力を尽くしたいと思っています。